

鎌倉市民に贈る

鎌倉の音楽家によるコンサート



ピアノ 内田 由美
サクソフォン 服部 吉之
ピアノ 服部真理子
ソプラノ 亀田真由美
ピアノ 田中由生子
ヴァイオリン 梅津 美葉

古谷誠一指揮
鎌倉交響楽団

2000年 3月11日(土)

午後 2 時 30 分開演

❖ 鎌倉芸術館大ホール ❖

主催● 鎌倉市芸術文化振興財団

協力● 鎌倉音楽クラブ

Program

I. ピアノ

ピアノ 内田由美

C. ドビュッシー / “版画”

〈塔〉〈グラナダの夕べ〉〈雨の庭〉

Claude Debussy

"Estampes"

Pagodes ; La soirée dans Grenade ; Jardin sous la pluie

II. サクソフォンとピアノ

サクソフォン 服部吉之

ピアノ 服部真理子

C. パスカル /

〈サクソフォンとピアノのためのソナチネ〉

アレグロ〜カダンス〜ラン(レント)〜フィナル〜コーダ

Claude Pascal

Sonatine pour saxophone & piano

P. クレストン /

〈サクソフォンとピアノのためのソナタ〉

Paul Creston

Sonata for saxophone & piano

第1楽章：生き生きと

第2楽章：静かに

第3楽章：明るく

III. 独唱とピアノ

ソプラノ 亀田真由美

ピアノ 田中由生子

R. シュトラウス / 〈万霊節〉 *Allerseelen*

Richard Strauss

〈セレナーデ〉 *Ständchen*

〈矢車菊〉 *Kornblumen*

〈鳴りひびけ!〉 *Kling!*

J. シュトラウス / 〈春の声〉

Johann Strauss

Frühlingsstimmen

休憩

IV. オーケストラ

鎌倉交響楽団

指揮 古谷誠一

L.v. ベートーヴェン / 〈プロメテウスの創造物：序曲〉

Ludwig van Beethoven *Ouverture "Die Geschöpfe des Prometheus"*

V. ヴァイオリン協奏曲

ヴァイオリン 梅津美葉

鎌倉交響楽団

指揮 古谷誠一

L.v. ベートーヴェン / 〈ヴァイオリン協奏曲 二長調 op.61〉

Ludwig van Beethoven *Konzert für Violine und Orchester op.61*

第1楽章：速く、しかし速すぎないで

第2楽章：ゆるやかに

第3楽章：ロンド・速く

プログラムおぼえがき

◆ドビュッシー：“近代フランス音楽”という音楽史上特異な時期を持つ19世紀末から20世紀初頭にかけてのフランスですが、その主役は何と言ってもドビュッシーでしょう。彼の天才は、古典からロマン派に至るあの壮大な音の歴史の重みと権威から音楽を解放し、感受性の新しい地平を発見したのですが、ピアノ音楽でその大きな契機となったのがこの曲集“版画”であろう…とされています。〈塔〉は東洋＝中国を、〈グラナダの夕暮れ〉はスペインをそれぞれ象徴していますが、ドビュッシーはどちらにも行ったことがない……にもかかわらず、〈塔〉では静けさの中に華麗な東洋が拡がり、〈グラナダ…〉ではギターによるハバネラのリズムやムーア人の歌声が、スペインが聞こえてくる…という、まさに「感受性における幻想(ドビュッシーの用語)」が新しい音を生んでゆく相乗作用となっているのです。〈雨の庭〉に至っては、音に制約がないために半端な標題音楽よりももっと具体的に、降る雨足が手にとるように聞こえてきます。

◆サクソフォンの2曲：パスカルは1921年パリに生まれた作曲家で、この〈サクソフォンとピアノのためのソナチネ〉は、当時のパリ国立コンセルヴァトワールの学長デルヴァンクールに依頼で卒業試験のために作られたもので、印象的なリズムを含む流麗なモチーフと3連符の力強いアレグロとカダンス、ゆったりとした中にも情熱的な盛り上がりを見せるラン(レント)、茶目っ気一杯のフィナーレ、急速なテンポのコーダ…と五つの部分からなり、サクソフォンの様々なテクニクと音楽性が分かるように出来ています。

1906年ニューヨークに生まれた作曲家クレストンの〈ソナタop.19〉は、サクソフォンにとって重要なレパートリーとなる作品です。第一楽章はリズムミクな第一主題、息が長く美しい第二主題を用いて、明晰で簡潔なソナタ形式。第二楽章はのびやかに歌われる旋律に豊かで印象的な和声がつくロマンティックな曲。第三楽章は明るくリズムミクなロンドとなり、若々しい活気と魅力に溢れた作品です。

◆同じシュトラウスでも、片やワルツ王ヨハン・シュトラウス、片や後期ロマン派の巨匠で現代にも生き残りヒヤルシュトラウス、有名さも同じですが音楽の内容は全く違う二人を歌い比べよう…という趣向です。リヒャルト・シュトラウスは、オペラからオーケストラ、器楽曲に亘って幅広い作品を沢山残していますが、その歌曲は爛熟した後期ロマンの洗練された官能美を歌い尽くし、最も重要だと言われています。中でも〈万霊節〉は「匂いたかい木犀草、紅いひな菊を飾りましょう。私はそっとあなたの手をときましょう。今日は一年にたった一度のなき人の魂の放たれる日ではありませんか。おお、私の胸に再び帰ってきてください。かつての五月の日のように…」と切々と歌う…。永遠の名曲と躊躇いなく申せる一曲です。〈セレナード〉は、イタリアへの旅の年1886年に書かれたと言われ、軽やかに明るい甘美さがいっぱい、また華麗なピアノリズムがいやがうえにもそれを引き立てます…「そっと起きて、だれも覚まぬように。月の光の夜のなかへふわりと飛んでおいで。醒めているのはただ愛ばかりなんだよ…」と歌うのを…。〈矢車菊〉は曲集「おとめの花」の第一曲、「矢車菊」とぼくはあの子を名づける、青い眼をした、あのやさしい娘を…。あの子はつつましく待っている、自分の吸うやすらぎの露を…。自分に近づくすべての人に無意識に感情の宝

石を伝える…。少女を花にたぐえて、こよなく愛らしい小品となっています。〈鳴りひびけ!〉「私の魂は清らかな音を発する。歌え! 魂よ、再びとり戻した充実についての懺悔の歌を!…」と、この曲はオペラ的で、快楽主義的に若々しく歌い上げるのです。それとは打って違って、ヨハン・シュトラウスのワルツ〈春の声〉です。コロラトゥアソプラノの技巧を堪能する、聴き手には本当に楽しいワルツですが、歌い手にとっては大変な難曲です。

◆バレエ音楽〈プロメテウスの創造物〉 ベートーヴェン

ウィーンでのベートーヴェンが31歳の頃、宮廷劇場で第一交響曲、七重奏曲、ピアノ協奏曲などを発表し、名声が昂まってきて、それを聞いた当時第一流の舞踊家サレヴァーレ・ヴィガーノの注文によって作曲したのがこのバレエ音楽〈プロメテウスの創造物〉とされています。プロメテウスは、陶土と水で美しい人形を二つこしらえ、これをオリンポス山に携え神々から魂を吹き込んで人間にする…と言い、さらにバルナス山に伴って芸術や諸々の感情を覚え、最後に酒神バックスから酒の功徳を教わり完全な人間とした…という筋のバレエですが、今日ではこの序曲だけが演奏されることが多いのです。はじめにアダージョの導入部があり、やがてオーボエとホルンが静かな旋律を歌い、それが発展して主部のアレグロに入ります。ここでは無窮動的に走り回る八分音符の連続があり、副主題の木管に引き継がれます。これらの要素が発展あるいは反復をしながら昂まり、全合奏の中、主和音が九つもぶつけられて終わります。

◆〈ヴァイオリン協奏曲 二長調 op. 61〉 ベートーヴェン

かのワーグナーが『我々がベートーヴェンの音楽の本質を語ろうとしても、我々は、その音楽を聴いた瞬間に、直ちに、恍惚とした気分になってしまうので、その本質を語ることなど全く不可能になるのだ…』と語ったと言いますが、このヴァイオリン協奏曲を聴くと、まさにその通りなのです。そして、さらに、この曲はその美しさ、品格の高いこと、長大なことなどからヴァイオリン協奏曲の王者にたとえられてきたことを改めて認識せざるを得ません。

第一楽章：いきなりティンパニがD音を四つぎざみ、このような開始は全く前例がないのですが、このリズムが全曲を通して重要な働きをします。第一主題も第二主題も木管で提示され、やがて独奏ヴァイオリンが即興風なカデンツァを奏しながら入ってきます。要するに音楽の骨組みはオーケストラが担い、独奏はその妙技を示しながら自由に出入りする…という感じででしょうか…。すなわち、先のワーグナーの言葉通りに、ヴァイオリンは人を恍惚とさせることに終始しているのです。第二楽章はゆっくりの変奏曲となりますが、独奏は益々細かく装飾的に音楽を縫ってゆき、その後漸く新しい旋律がはじめて独奏で出て、それが変奏されてから一旦消えそうになってから、目が覚めたように弦楽器群がfの響きを出し、独奏のカデンツァとなりそのまま第三楽章のテーマをG線(低い弦)で弾きはじめます。ロンドですからこのテーマは手を変え品を変え現われますが、独奏ヴァイオリンは自らも恍惚となった如く動き回り、副主題も今度は独奏が先行し、終りには再度カデンツァで見せ場を作りクライマックスとなって終わるのです。(高木 幸三 記)

出演者プロフィール(出演順)



内田由美(うちだ ゆみ) ピアノ

北鎌倉女子学園音楽科を経て、東京芸術大学音楽学部を卒業。今年同大学院修了。バリ地方音楽院第3課程修了。鎌倉市小・中・高学生音楽コンクール総合第1位市長賞、並びに野村光一賞。ウィーン音楽コンクール in Japan第2位、並びに特別賞。フランスのブレストピアノコンクールショパン部門第1位。1999年4月、第6回ミューズの森 鎌倉コンサートにて、大河内雅彦氏指揮、慶應義塾ワグネル・ソサエティー・オーケストラとチャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番を共演。同10月、東京王子ホールにてショパンリサイタル。同12月、サントリーホール主催、レインボウ21サントリーホール デビューコンサート1999に出演。山口喜久子、小牧洋子、角野裕、園田高弘の各氏に、フランスにてブルーノ・リグット、コジマ・ジュベールの両氏に師事。

現在、ハリナ・チェルニー=ステファンスカ女史のもとで研鑽を積んでいる。



服部吉之(はっとり よしゆき) サクソフォーン

1953年名古屋生まれ。1976年東京芸術大学卒業。サクソフォーンを阪口新、秦賢吾の両氏に師事。1979年同大学大学院修了と同時に渡仏。パリ市音楽院でジャック・テリー氏に師事。同年審査員全員一致の一等賞で卒業。1975~1978年、東京佼成ウインドオーケストラで首席を務める。1974年よりキャトルローゾ・サクソフォーンアンサンブルに参加。1978年、1980年民音コンクール室内楽部門入賞。現在、室内楽、ソロなどを中心に全国各地で演奏活動を行っている。

北鎌倉女子学園、洗足学園大学、東京コンセルヴァトアール尚美講師。



服部真理子(はっとり まりこ) ピアノ

ピアノを幸島輝治、吉田よし両氏に師事し、東京芸術大学付属音楽高校を経て、1979年同大学を卒業する。同年渡仏。G.ムニエ女史に師事。1981年エビナル国際コンクール入賞。「オペラアター・こんにやく座」をはじめとする数多くの舞台ピアノを手がける。

現在、東京コンセルヴァトアール尚美ディプロマコース講師。



電田真由美(かめだ まゆみ) ソプラノ

東京芸術大学別科に学び、洗足学園大学音楽科卒業。児島百代、中村浩子、奥村淑子、中山梯一の各氏に師事。個性的なコロラトゥーラソプラノとして『魔笛』の夜の女王役でデビュー以来、二期会公演をはじめ多くの公演に出演している。『後宮よりの誘拐』のコンスタンツェ、『ボントの王ミトリダーテ』のアスパージャ、『劇場支配人』のヘルツ夫人、『シンデレラ』(マスネー)の妖精の女王等のコロラトゥーラの難役に加え、『ドン・ジョヴァンニ』(オルフェオとエウリディチェ)、『ヘンゼルとグレーテル』(金閣寺)等に出演している。1988年より海外都市10カ国でのコンサート出演。また、『第九』やオラトリオ等の独唱の他、リサイタルも回を重ねている。音楽の友社の日本歌曲シリーズにも参加、好評を博している。

現在、二期会会員、洗足学園大学講師。



田中由生子(たなか ゆうこ) ピアノ

北鎌倉女子学園音楽科、桐朋学園大学ピアノ科卒業。内藤ゆり子氏、兼松雅子氏に師事。1970年、鎌倉市小・中・高学生コンクールにおいて教育委員会賞受賞。1974年、神奈川県立音楽堂主催新人演奏会出演。1984年、ジョイントリサイタルを開く。1986年、87年、89年、98年にはピアノデュオリサイタルを開き、1988年には、ユーゴスラビア、オーストリア、1991年にはブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ各国にて派遣ピアニストとして演奏活動を行う。1993年北鎌倉女子学園主催プロムナードコンサートにて神奈川県フィルハーモニーとシューマンのピアノ協奏曲を共演。弦楽器、声楽、合唱の伴奏者としても活躍中。神奈川県主催(第九)、藤沢市民オペラ(ウィリアム・テル)にピアニストとして参加。女声合唱団藤沢クライスコア伴奏者。桐響会伴奏者。現在、北鎌倉女子学園音楽科講師。



梅津美葉(うめづ みよう) ヴァイオリン

鎌倉生まれ。県立鎌倉高校出身。3歳よりヴァイオリンを始め、12歳で初リサイタルを開く。桐朋学園大学を経て、パリ・エコールノルマル音楽院最上級演奏家ディプロマ過程(大学院)へ入学。1997年3月、審査員全員一致の最優秀賞及び特別賞を得て卒業。同年、ノルマンディー音楽祭特別賞受賞。江藤俊哉、Hクレバース、A.グラー、I.ギトリスの各氏に師事。室内楽をG.マルティニ女史に師事。

これまでに、NHK交響楽団、東京交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団等の主要オーケストラと共演の他、各地でリサイタル、音楽祭、室内楽演奏会に出演。1997年、トヨタ創立60周年記念コンサートの全国ツアーに、ソリストとして同行。ベルリンフィルハーモニーのメンパーとヴィヴァルディの『四季』等を共演、絶賛された。1999年10月、フランス国立ロワールオーケストラのフランス国内ツアーにソリストとして参加。『静かな落ち着き、強さと繊細さを合わせ持つ精緻な構成、まるで夢の中をたどるように観客を魅了した。』と評された。1994年長編アニメ音楽映画『星空のバイオリン』のヴァイオリン・ソロ録音及び声の特別出演。翌年フィリップスより同タイトルのCDをリリース。高い評価を集めた。他にBMGより『舞う〜ダンス・コレクション』、『Frühling - 春 -』のCDをリリースしている。1990年かながわ音楽コンクール総合第1位及び県知事賞受賞。1991年日本音楽コンクール第1位、併せてレウカディア賞、黒柳賞、鷺見賞、E.ナカミチ賞受賞。1992年優れた演奏活動により鎌倉市政功労賞を受賞。現在パリを本拠に音楽活動を行っている。



古谷誠一(こたに せいいち) 指揮

東京大学文学部卒業。在学中から指揮を三石精一氏に師事。卒業後、桐朋学園音大で指揮を小澤征爾、秋山和慶、堤俊作の各氏に、作曲・ピアノを故矢代秋雄、三善晃、末吉保雄の各氏に師事。『魔笛』(ドン・ジョヴァンニ)、『ラ・ボエム』、『椿姫』のオペラから『サウンド・オブ・ミュージック』等のミュージカル、(カルミナ・ブラーナ)、ヤナーチェクの(グラゴール・ミサ)、ヴェルディ、ベルリオーズの(レクイエム)等の大がかりな舞台作品まで、

手がけた作品はあらゆるジャンルにわたり、日本オペレッタ協会の定期公演では(マリッツァ伯爵夫人)(白馬亭)(微笑みの国)等、日本で演奏されることの少なかったオペレッタを数多く指揮して高い評価を得る。また、日本フィル、東京シティフィル、東京交響楽団、新日フィル、九州交響楽団、名古屋フィル、関西フィルなど数多くのオーケストラを指揮。1997年にはカーネギーホールでセント・ルークス・ニューヨークオーケストラを指揮し、絶賛される。

現在、名古屋芸術大学助教授、セントラル愛知交響楽団正指揮者。



鎌倉交響楽団(管弦楽)

市民のアマチュア管弦楽団として昭和38年に発足、現在団員は120名を超え、春と秋の定期演奏会、ニューイヤークコンサート、鎌倉市教育委員会主催のサマーコンサート、鎌倉市の幼稚園協会による園児の演奏会、年2回の団員による室内楽演奏会等、常任指揮者の古谷誠一氏のもとに鎌倉の音楽文化のリード役として活動が続いている。